第７回 J・ロンドンへの旅と Mom の死

会長　辻井　栄滋

『呼び声』でこれまで２度ほどにわたり，また，各支部読書会でも呼びかけておりました恒例の「J・ロンドンへの旅」に，今回も９月１～８日に総勢７名で出かけてまいりました。リピーターは３名（２度めと３度めの方，それに毎回の私），あとの４名が初めてでした。鹿児島２名，熊本・山口各１名，大阪府２名，そして京都の私で，今回も過去の「旅」に負けず劣らずのすばらしいものとなりました。（その詳しい中身については，後ろのリレー・エッセイをお読みください。すでに次の「旅」を目指されている方々には，とりわけ参考になること必定です。（ただ，この「旅」は実際に参加し，みんなでその喜びや歩くしんどさ等々を共有してみないと，実感することはできませんが。）

この「旅」を企画・案内するようになってもう７回めを終えました。J・ロンドン関係の地を訪ね歩くことは毎回ダブりますが，それでも，世界で最も魅力的なサンフランシスコのベイ・エリアのことですから，ほかにも見どころがいっぱいあります。その時々によって新しいスポットを見つけては「今回初！」あるいは「久しぶり！」と言える所をいくつか見つくろい，私自身も秘かに楽しんでいるのです。それに，去年や一昨年の５月と違い，久しぶりに９月初旬という時節（５月とはまるで違います！）も感じて帰ってきました。この「旅」にはいろんな楽しみ方があるというわけです。……

初めてあるいは久しぶりの所を順に挙げてみますと，サンフランシスコ近代美術館（SFMOMA），San Francisco Shopping Center，GAP，Lombard 通りを下ってまた登ったこと（以上初めて），Wax Museum，Bay Cruise（この２つは久しぶり），Napa wineries めぐりの１つ Beringer Vineyards（初めて），Piedmont 丘陵（久しぶり）等でした。さらには，卒論に *Martin Eden* を取りあげる方がいらして, Piedmont hills と Lake Merritt は外せないと思って選んだりもしたものでした。何しろ限られた時間内なので，毎回全部というわけにはいきません。リピーターの方たちにも配慮しなければなりません。いずれにせよ案内役の私も，ない知恵をしぼりながらそれなりに初の訪問地や久しぶりの地，何人もの人たちとの再会を，結構エンジョイしているのです。さて，次回もまたどんなエキサイティングな旅が待っているのでしょうか。

第５日（９月５日）の朝早く，Golden Gate Bridge や Sausalito を経て，Sonoma Plaza へと

向かい，その近くの Vailetti Drive にある Agua Caliente Villa というナースィング・ホームを訪ねました。J.L.Foundation の事務局長であるわがアメリカの母 Winifred Kingman を，前回に続き皆さんと訪問するためでした。この前には，車椅子ながらも元気で，再会を喜んでくれました。出たばかりの拙著『二十世紀最大のロングセラー作家―ジャック・ロンドンって何者？』（明文書房）にも，みんなでプレゼントした花とともに大喜びしてくれたものでした。

ところが，彼女はそこにいませんでした。「先週，別の所へ移られましたよ」というのです。場所を訊いて，訪ねてみました。Sonoma Health Care Center という所でした。会えたことには会えたのですが，今回３度めのリピーターで「2002 年の時にはお元気でピンピンしておられたのに！」と言う熊本の桑原さん同様，私も大きなショックを受けました。声をかけても，目を開けることはなく，ただ「No! No!……」というたぶん痛みの声がもれてくるのみで職員の説明によれば, ひどい床ずれができているとのことでした。そうした Mom の様子に，私は思わず泣いてしまいました。同席の皆さんも，もらい泣きをされました。……

それから２週間ほどのちの９月 21 日午前８時に，Winifred Kingman は逝きました。財団から訃報を受けとったのは，９月 27 日のことでした。私たちが来るのをまだかまだかと待っていたかのように逝ってしまったのです。（そういえば，父親の Russ Kingman の時はまさにその通りで，彼女と私が，その臨終に立ちあったのでした。）

J・ロンドン研究や振興のうえで２人が果たした役割・残した功績が絶大なものであったことは，すべての人々の認めるところでしょう。とりわけ私の場合は親子の関係まで結んだのですから，寂しさがひとしお身にしみるこの頃です。思い出がいっぱい詰まったソノーマ谷やグレン・エレンが，すーっと遠のいてゆく思いがいたします。J・ロンドン・ブックストアとともに。彼女の冥福を祈ってくだされば幸いです。（2006 年 10 月記す）